

# フィリピンレポート

## 「国のちがい、医療のちがい」

笠原緑<sup>1)</sup>

1) 国立病院機構仙台医療センター ウイルスセンター 臨床研修医

### 1 はじめに

2017年11月5日から11月18日にかけてフィリピン共和国立熱帯医学研究所 RITM (Research Institute for Tropical Medicine) で主に感染症疾患を中心に研修に参加させていただいた。

RITMは1979年日本国政府とフィリピン国政府の間で熱帯医学研究所の設立に関する合意が交わされ1981年JICAによって設立された。フィリピンでは感染症が保健衛生分野の最大の問題であり、RITMはフィリピン保健省において感染症や熱帯病に関する研究を中心となって行う役割を担っている。

### 2 主な感染症

RITMで実際に見学した入院、外来患者の主要感染症疾患は動物咬傷、性感染症、結核、HIV・AIDS、AIDS関連疾患などである。入院患者のほとんどはAIDSとその合併症を発症している人達であった。具体的にはニューモシスチス肺炎、クリプトコッカス髄膜炎、サイトメガロウイルス感染症、結核などである。どれも日本では珍しい疾患で症状、検査法、治療法など全てが興味深く感じられた。その中でも特にHIV・AIDS感染者を目にする機会は多くフィリピンは世界と比してHIV・AIDS患者が増加している背景があることを実感した。その理由としては青年層が貧困などの理由でHIV感染経路についての教育が受けられないこと、同理由で感染していても未受診であることなどが挙げられる。貧困が原因で売春などの性産業に従事し、そこで感染する若者たちが後を絶たない。この負の連鎖を断ち

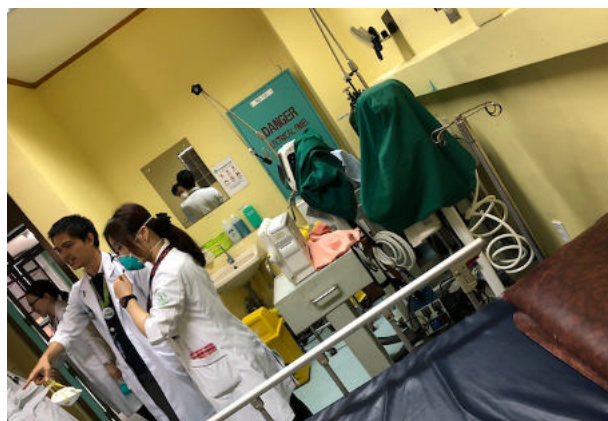


図1 RITMでの研修の様子

切るためには根本的には貧困の解消が、そして直接的には性教育などの啓発活動の必要性を、強く感じた。

### 3 動物咬傷

HIV・AIDSの他にフィリピン研修で多く見られたのは動物咬傷である。日中の外来では毎日1～200人ほどの動物咬傷の患者たちが押し寄せていた。フィリピンで動物咬傷が多い理由として野良犬、

野良猫が多いことが挙げられる。また、飼育犬であっても放し飼いにしていることが多く実際に滞在中多くの放し飼いの犬たちをみかけた。一般的に犬、猫などの動物咬傷は症状、創部の状態によって重症度を評価しそれに準じた治療を行っていく。治療としては抗狂犬病免疫グロブリン、狂犬病ワクチンの接種が挙げられる。創部の位置によっても重症度は左右され頭部に傷があると重症度は上がる。RITMでは実際の外来での問診から治療までの流れを見学することができた。

動物咬傷の中でも問題となるのが狂犬病である。フィリピンでは毎年 200-300 例の狂犬病症例が報告されており深刻な問題となっていて、フィリピン政府は 2020 年までに狂犬病を撲滅することを目標としている。狂犬病は致死率ほぼ 100%であり犬を対象とした集団ワクチン接種の励行は狂犬病清浄化のために必須といえるだろう。

今回滞在中実際に狂犬病の症例を見学する機会は残念ながらなかったが、RITM の病理学講座にて狂

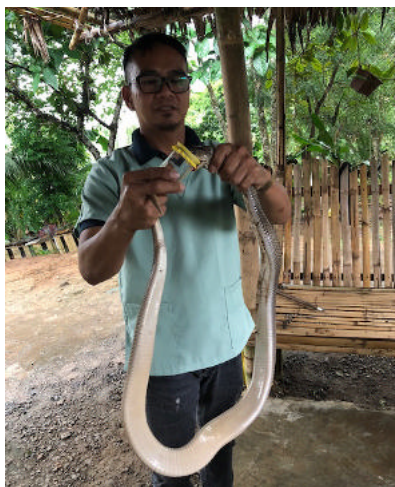


図2 フィリピンコブラの毒の抽出 (上)、放し飼いの犬たち (下)

犬病を患った犬の脳の組織をみることができた。また、講義の中で出てきた犬の頭を解剖する映像は衝撃的であった。

#### 4 まとめ

今回の 2 週間の研修の体験は日本の医療しか知らない私達にとって非常に刺激的であり衝撃の連続であった。発熱、リンパ節腫脹など一般的な症候を一つとっても日本とフィリピンでは考える鑑別疾患が異なっていた。また、フィリピンの医療に接して感じたのは必要な検査と不必要な検査を取捨選択しておりこれは日本の医療においても無駄な医療費の削減のために手本にすべき点だと感じた。日々スクリーニングとして広範な検査を無意識に行っている自分の医療行為を見直す機会にもなった。

#### 5 最後に

今回このような研修の機会をくださり、同行してくださった西村先生、目黒先生をはじめフィリピンで指導してくださった RITM の Chin 先生、スタッフの方々、また医療センターの先生方に心から感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。



図3 RITM の先生方と